

一般部門

全身がふるえた・・・

いとう
【伊藤 ひろゆき・熊本県】



内館牧子賞

12年間の長い闘病生活の中で、9度の入院を経験した。3度目の入院の際、当初はそれまでの疲労回復（休息）のため1カ月くらい病室や病棟内で過ごした。そして、徐々に病棟リハビリプログラムを始めた。回復のためできる限り参加し治療に取り組んだ。自分では、まだ病は「3割程度の回復」という実感であった。

しかし2カ月半たったころ、主治医に「伊藤さん、あと10日くらいで退院してください」と唐突に言われた。私は、「今、退院したら、何のために入院したのか分かりません。まだ症状は良くなっていません」と医師に告げた。しかし医師は机をドーンとたたき、脅すように退院を迫った。私の切なる懇願は、結局受け入れられず、早すぎる退院と、その後の生活を考え、悲嘆に暮れた。その時は、食事の味すら感じなかった。

その夜、病室で大きな不安と落胆の中しょんぼりしていると、夜勤の看護師さんが私のもとに来られた。そして、いろいろ会話した後、目線の位置までしゃがまれ、こう言われた。「今日の診察のことは、すべて日勤の看護師から聞きました。私たちが話し合いした結果、伊藤さんの退院は、まだ早すぎるとの結論に達しました。私たち看護師は医師の下で仕事をしていますが、看護師としてのプライドはしっかりとあります。先生を説得します。安心してください。私たち全員で伊藤さんを守ります」。

私はその看護師さんの真剣なまなざしと心の底からの言葉に接し、全身が震え上がるほど感動し、少し涙を浮かべた。何か大いなるものに包まれたような安心感を得た。そして、入院の継続が可能となり、治療に専念することができたのだ。

後に分かるが、このころ、病院での3カ月までの入院制度（急性期）が導入されたらしい。在院日数を超えると、病院の診療報酬の点数が下がるらしいのだ。それにしてもこの時の主治医の態度の変化には驚いたところではなかった。長い12年超の闘病生活の中で、数多くの医療従事者と出会った。もちろん良き医師との出会いもあったが、特に看護師さんとの感動的なエピソードは、数多くあった。その中でもこのエピソードは、私の心に深く染み込むほど強烈で、そして感動的なものであった。Kさん、ありがとうございました。